

グスターフ・コッシナ教授と

現代獨逸考古學界

角 田 文 衛

史』に詳細に記述されてゐるのであつて、今更私の贅言を要さぬ所である。

第一次歐洲大戰に至るまでの一世紀は、歐米の考古學史上、洵に空前絶後とさへ言へるほど華々しい時代であつた。私達が從來殆ど夢想だにしなかつた古代の遺跡が到る處で發掘され、其れと共に、悠久な年月に互つて營まれた人間生活を、具象的に物語る重要な遺物は、無數に發見されたのである。此等に伴うて考古學自體も大いに發達し、今まで縹渺模糊としてゐた古代文明の様相も、ほゞ其の概觀を許す程度に、鮮明となつて來たのである。言ふまでもなく、此の間の事情に就いては、故濱田先生が譯されたミハエリス教授の『美術考古學發見』に詳細に記述されてゐるのであつて、今更私の贅言を要さぬ所である。

無論、太戰後と雖も、考古學者の鋤は、古代文明の跡を求めて着々と進められて行つた。例へば、これを歐洲から西亞細亞方面に互る分野に就いて見ると、オスティア、ヘルクラネウム、アリシャル・ヒューク、ボガズコイ、ピブロス、ウル、アンシュール等々の發掘の成果は、益々私達に、古代文明の發展の相を具に呈示してくれてゐるのである。他方、東亞に於いても、新しく其の古代文明を組織づける數々の遺跡の發見は、特筆すべきものがある。ところが、其れと同時に、考古學を以つて單なる Doktrin des Spatens とするに満足せず、より高次な、

古代を一つの觀點から認識し、綜合體として之れを把握しようとする傾向も亦、現れて來たのである。さうしてかゝる氣運を醸成し、自ら其の先驅者として學の體系化と後進の誘掖に盡力し、今日なほ偉大なる影響を及してゐる學者を、歐洲學界に於いて擧げるならば、其れは、今から十年許り前に前後して逝去した蘇聯のマル教授 (Игорь Иванович Марп, 1864-1934) と、私が茲に述べようとするコッシナ教授 (Gustaf Kossinna) であると謂へるのである。

マル教授を指導者として刮目すべき發達を遂げた蘇聯の考古學界に就いては、既に梅原先生が『北方系文物の研究』其の他で紹介されてをられるが、コッシナ教授の功績に就いては、其の學的業績が夙に十九世紀の末葉から發表されてゐたにも拘らず、從來我が國では殆ど紹介されなかつたやうに見受けられる。マルとコッシナの兩教授は、其の方向も、履歴も全く逆であつた。マル教授が *Археология как наука о прошлом* を標榜するに對し、コッシナ教授は、*Archaeologie als eine hervortrage-*

nd nationale Wissenschaft を主張し、マル教授が政府の力強い支持を得て蘇聯考古學界に君臨したに反し、コッシナ教授は、學界から殆ど黙殺され、敬遠されたまゝ世を去つたのであつた。いま私は、遲滞しながらコッシナ教授の生涯と、其の現代にもつ意義とをかいつままで申し述べたいと思ふのであるが、此れに依つて、現代の獨逸考古學界の動向の由來する所を、多少でも了會して戴ければ欣びに堪へないのである。

二

グスターフ・コッシナ教授は、一八五八年(安政五年)九月廿八日、東プロイセンのリトゥアニア國境に接した *Heintz* の町に生れた。父はヘルマン、母はナターリエと言つた。父は、その地のギムナジウムの教授であつたし、母は、騎士階級に屬する土地の名家ゲンツマー家の出であつたと謂はれてゐる。コッシナ家も、代々此の地に住んでゐた家柄であつた上に、父のヘルマンは、頗る保守的傾向の強い人であつたから、少年グスターフ

は、兩親の膝下に於いて、充分に國民的意識を培はれつゝ生長した譯である。加之、彼の少年時代には、普墮戰役（一八六八年）や普佛戰爭（一八七〇—七一年）等の様な、プロイセンの偉大な政治的發展や獨逸帝國の生成と關聯する事件が起つたのであつて、其等は少年グスターフに、永続的な祖國愛を鼓舞したのであつた。彼は、後年、兩親と共に出掛けたセザンの戰勝祝賀の日の感激に就いて、屢々物語るのが常であつたといふ。

併しながら、家庭に於ける少年時代は、三つ年長の兄との關係で、かなり窮屈であつた様であつて、此れが或いは教授のやゝ閉鎖的な性格を方向づけたのかも知れぬのである。コッシナ教授は、獨逸人としてはかなり小男の方であつたが、また體質も頑健ではなかつた。殊に、ギムナジウム卒業直前に腸チフスを患つてからは、生涯、病苦と闘はねばならなかつた。一八七六年、教授は、ゲッティンゲン大學に入學したが、ついでライプツィヒ、柏林へと移り、遂にシュトラスブルク大學で一八八一年に哲學士の稱號を得たのであつた。

學生時代に、教授が先づ勉學したのは、古典言語學であつたが、それからゲルマン言語學や獨逸の考古學、地誌學、美術史の勉強に没頭した。けれども、何んと言つても、彼に決定的な影響を與へたのは、柏林大學のミューレンホーフ教授 (Karl Müllenhof) であつた。當時、想念されてゐたゲルマン考古學は、未だ現代の意味に於ける純然たる文化史的研究ではなかつたが、併し單に文獻のみならず、遺物をも取り扱はうとする方向へ動いてゐた。ともかく、ミューレンホーフ教授の強烈なる感化によつて、コッシナ教授は、獨逸の種族史を究めようとする意圖を抱くやうになつた。教授はミューレンホーフ教授の弟子であることを自任し、特に師が一八八四年に歿した後は、師の仕事を繼承し、古代のゲルマン民族の生成と發展とを究明しようと決意したのである。尤も、其の頃のコッシナには、未だ後年樹立しえたやうな體系はなく、其の學風には、頗る典籍學的色彩が濃厚であつた。教授の最初の論文《Die ältesten hochfränkischen Sprachdenkmäler》の如きは、未だ舊套を脱しないもの

であつた。

此の卒業論文の後、コッシナは、生計の道を講ずる爲に、一八八一年、ハッレ大學附屬圖書館の助手として赴任した。ハッレに六年ばかり居た後、一八八六年に至り、司書官として伯林大學に轉じ、翌年にまたボン大學に轉任した。そして一八九二年には、再び伯林へ戻つて、王室圖書館長の職についたのであつた。實に此れは、日本流にいつて、教授が三十五歳の時であつたのである。

自分のあらゆる時間を振り向け、もつてゲルマン考古學の體系樹立に没頭するを念願としてゐた教授にとつて、かうした圖書館長の職は、餘りにも束縛の多いものであつたし、また其の官僚としてのくだらない多忙さは、全くコッシナ教授を辟易させたやうである。それで教授は、自分を學術的研究に没頭させてくれるやうな地位をひどく憧憬れ、屢々當局に頼んだやうであつたが、先覺者は世に容れられぬと言はうか、教授の學問を理解してくれる人は至つて少く、教授の希望は、事毎に實現されなかつたやうである。例へば、コッシナ教授は、一

八九〇年、伯林博物館に地位をえようと運動して、失敗してをるし、一八九九年には、アルトナ(Altona)博物館長たらんとして無駄骨を折つてゐる。次に、一八九六年には、獨逸古代史の教授の地位を獲得しようとした彼の努力が、水泡に歸してゐる。この年、ケーニヒスベルク大學の言語學教授ベッツェンベルガー(A. Bezenberger)は、獨逸考古學の講座を創設することが見込みないことに關し、彼に宛てた手紙の中で、自己の見解をかう傳へてゐる。

……ゲルマン學の教授を置くことが問題になる場合、確かに現存する學部では、また言語と稱される一切のものに於いて、古典の眼鏡を以つて處理しようとする限りに於いての學部では、いつでも本文考證だけが問題となるでせう。少くとも、言語學者達は、退屈な原文を十度も引張り出しては、容易に貴方の邪躰をすることが出来ませう。ともかく、貴方は賢明であるように、そして單に歴史的問題のみを考へられないように願ひます。

この事實は、ゲルマン考古學に對する當時の無理解さをよく物語つてゐると言へよう。況んや、コッシナ教授が企圖する學問が、一部の人々を別とすれば、學界から白眼視されてゐたことは、勿論なのである。この一部の人は、彼の學術的研究の意義を認め、彼が大いに研究を進めうるやうな地位を與へようと非常に盡力してくれた。そして一九〇〇年に至つて、彼は、圖書館長として教授の稱號を授けられたのである。

一九〇一年、伯林大學の歴史地理學の教授として有名なジークリン(W. Sieglin)は、充分に研究に専心せしめる爲、俸給を與へつゝ一年の休暇をコッシナ教授に許すことを、内閣に提議した。其の提議文に於いて、ジークリン教授は、大體左のやうに言つてゐる。

疑ひもなく、コッシナは、現在ゲルマン太古史の領域に於いて、我々の有する最も重要な研究家である。遠古のゲルマン民族の生成と擴張に就いての困難な問題を、幾分なりとも解明する爲には、言語學、人類學、

歴史學、文化史及び地理學等の廣範圍に互る研究が必

要である。そして其等が一人の學者に於いて獨特に綜合されることは、頗る稀であるが、しかし此れをコッシナは最も満足な方法を以つて爲し得たのである。即ち、コッシナは、現在、彼以外に何人も充分に果たし得ない、知識の結合を果たしたのであつて、彼は、何人も理解しえぬ遠古の獨逸國民性の發展を理解してゐるのである。

コッシナが、彼の研究の完成前に學問から引離されるならば、これは我々にとつて、近いうちに起るであらう紛失を意味する。ミューレンホーフの歿後、ゲルマン考古學は一種の停滞状態に入り、さうしてかゝる停滞は、ミューレンホーフが人類學と先史學とを等閑視したといふ一面性によつて惹起された事實に基づくことが多いのである。彼がとつた方法によつて、學問は著しく前進したが、更に進歩することは出来なかつたであらう。コッシナの獨特なる才能こそは、此の停滞から我々を救つてくれたのであつて、これ實にコッシナが人類學、先史學、言語學等の關聯に於いて自己

の研究を發表した時に始まるのである。私は八日前、二、三の友人と共に、コッシナのことを良く言はない樞密顧問官某氏の處に居た。某氏は、コッシナが、圖書館長としての職よりも學問に關心を抱いてゐるといふ理由で、コッシナを非難した。圖書館長の長官として、樞密顧問官某氏は、恐らく自己の非難を妥當と思つたであらう。しかしながら、内閣はより高次な立場を執らねばならぬ。コッシナは凡庸な官吏であるかも知れぬ。けれども、彼は研究室に於いては、學問の爲に、従つて國家の爲に、自己に不向きな圖書館への關心の缺如が恐らく許されるであらう程に、絶大なる裨益を致したのである。彼の才能に最も適合した職務に彼を任命することは、國家が最も合目的に行動することである。國家は、圖書館長コッシナを、容易に百倍の價値に換へることが出来るのである。

ともかくジークリン教授の提案と、相當困難な内閣との談判の結果、その年即ち一九〇二年になつて、やつとコッシナには、伯林大學の助教授の地位が與へられ、獨逸

考古學を擔任することゝなつたのである。そして此れを一大轉機として、今まで抑壓されてゐたコッシナ教授の天才は、縱横無盡に活躍するに至つたのである。

ボンに於いて、コッシナ教授は、一八八九年にカタリーナ・フォン・ハウテン (Katharina von Hatten) と結婚した。そして翌年には、長男が生れた。併しカタリーナは、結婚生活十五年にして、教授に先立つたのであつた。一九〇五年、彼は調査の爲に、フリーザック (Friesack) に旅行したが、其處で、郷土博物館を管理して居た印刷所の經營者ゴルチェ (Goltzsche) 家と知合ひになつた。そして一九〇六年に、彼はその娘マルガレーテ (Margarete) 嬢と結婚した。一九〇九年に、彼は一人娘のマリアンネ (Marianne) を得たのであつた。コッシナ教授は、ひどく此のマリアンネを可愛がつたのであるが、一九三一年、ふとしたことからこの愛娘が歿した時、此の老いたる教授は、再起し難い打撃を蒙つたのであつた。教授は、見る／＼うちに憔悴し、この悲歎を紛らさうと烈しい研究を試みたやうであつたが、其の年の冬に襲つ

た重患は、遂に教授の再起を不可能にしたのである。即ち、コッシナは、伯林大學助教教授のまゝ、一九三一年十二月廿日に、七十三歳を以つて逝去したのであつた。

三

さてコッシナ教授が一生に於いて爲し遂げた業績を顧みると、私達はその老大きに驚歎するのである。彼は、廣い範圍に亘つて極く専門的な細い事實を扱つた論文を澤山發表した許りでなく、また逐語的に骨を折つて推敲し、粒々辛苦の後に書き上げた多くの著書や講義案を殘したのである。實際、彼は生活の大部分を書齋や研究室で送り、深更に至るまで研究に没頭するのが恒であつた。事實、マルガレーテ夫人は、夫に休養を得させようと屢々彼を散歩に誘つたことであつたが、彼がそれを承諾することは減多になかつた。コッシナ教授の興味は音樂にあつた。氣の向いた時など、よくピアノをたゝいて僅かに休息をとつた位であると謂はれてゐる。教授は伯林大學で音樂史を講じてゐたゲハイムラート・フライシ

ヤー (Geheimrat Fleischer) と親交があつたが、此れは音樂の取りもつた縁であつた。かういふ彼を正しく評價してくれる友人は、さう澤山はゐなかつたが、彼が伯林大學に教鞭をとつて以來、彼を尊敬する學生は、次第に殖えて來た。また外國にあつて、彼の業績を逸早く認め、かつ援助を惜しまなかつたのは、モンテリッス (O. Montelius)、アルムグリーン (O. Almgren)、オーベルイ (N. Åberg) 等々の如き、北歐の學者達であつた。此等北方の學者達は、故國に於いて彼が全く得られなかつた知遇を以つて、コッシナ教授に對する尊敬を表したのであつた。即ち、一九一一年、コッシナ教授は、王立丁抹北方考古學會の委員に推され、一九一四年には、ヘルシンのフィンランド考古學協會の委員に、また一九三一年には、王室瑞典學士院の名譽會員に推擧されてゐる。また一九一八年には、ケーニヒスベルクのブルツシヤ考古學會及びシュティンに於けるボンメル史學考古學會の名譽會員に、更に、一九二〇年にはエルビングに於ける考古學會の名譽會員に推されてゐる。

一九三一年八月二日、コッシナ教授の學位五十年紀念式が總長自ら主宰して伯林大學で開催され、教授は心からの慶祝の言葉と新しいシュトラスブルク大學の學位記を受けたのであつた。洵に、その逝去の年に於いて始めてコッシナ教授は、社會が偉大なる學者に對して拂ふべき正當なる評價の標シグナルを享けたのに過ぎぬのである。

四

茲で私達は、考古學史上、コッシナ教授が樹立した偉大なる學的功績を正しく評價する爲に、十九世紀末葉に於ける獨逸の所謂『先史學界』を顧る必要があらう。十九世紀の中頃、ウィーンの歴史家コツホ(Otto Koeh)は、『墳墓から發見される古代の青銅や黃金製の遺物を以つて、羅馬人のものではないならば、必然的にケルト人のものであるとする事は、獨逸人にとつて規則である』と言つてゐるが、當時にあつては、ゲルマン人は何等固有な文化を所有せず、もし古代獨逸人の文化に優れたものがあるとするれば、それは羅馬文化か、その影響を受けたケ

ルト文化の所産であると考えられてゐたのである。そして過去二、三世紀に於ける獨逸人のなし遂げた世界的寄與すらが、ルネッサンスを契機として始めて可能であつて、暗い、野蠻な中世文化から將來されたものではないと思はれてゐたのである。

加之、獨逸の所謂『先史考古學』は、未だ大學で講義されることはなく、考古學と言へば、直ちに希臘羅馬の所謂『美術考古學』を意味した譯であつた。勿論、獨逸には、所謂『先史時代』の研究に志す人々も少からずをつたが、彼等は未だ素人の誇りを免れぬ人達であつた。従つて、所謂『先史考古學』は、全く獨立性を認められず、歴史家、人類學者、言語學者の補助學として僅かに其の存在を認められてゐたに過ぎないのである。その上、前述のやうな羅馬主義的見解を以つて臨んだのであるから、獨逸を初め、北歐諸國の古代が全く何等の組織もなく放置されてゐたと謂はれるのも、止むを得なかつたのである。

アルプス以北の諸國に於いて、先づ出土せる遺物自体に基づいて該地域の古代を解明しようと思したのは、瑞

典のモンテリウス教授、並びにフィンランドのアスペリ
ン教授(J. R. Aspelin)であつた。一八八五年、モンテリ
ウス教授は、スカンディナヴィヤ半島の青銅時代の編年設定
に關する有名な論文を發表した。これは瑞典語で書かれ
てゐたため、一般に有名になつたのは、一八九〇年以後
であつた。教授が、自然科学の方法に大いに示唆を受け、
遺物に對して型式學的方法を以つて臨み、各型式の發展
の系列によつて時代構成を試みようとしたことは、今更
申し上げるまでもないほど有名な事實である。かゝる研
究法を學んで獨逸に於いて編年を試みた人は、ケーニヒ
スベルクのテッシェラア(Otto Tischler, 1843-1891)で
あつて、疑ひもなくコッシナ教授は、彼から強い影響を
受けたのであつた。そしてコッシナ教授は、ゲルマン民
族の遠古史は、比較言語學によつて究明さるべきではな
く、出土する遺物と人骨から闡明されることに想到した
のである。既に、一八八九年に發表した《Germanische
Vorzeit》には、現状を打破し、新しい方法論を模索し
ようとする意圖が見えてゐるが、翌年發表した《Die

グスターフ・コッシナ教授と現代獨逸考古學界

Sweben im Zusammenhang der ältesten deutschen

Völkerbewegungen》には、漸く辿りえた新しい方向が
示されてゐる。そして五年の實地研究と思案の結果によ
り、新しい方法論を提けて學界に獅子吼したのは、一八
九五年であつて、實に九月九日、カッセルで開催され
た人類學會の席場であつた。現代の獨逸の考古學者は、
此の日以後を『獨逸先史學研究の neues Zeitalter』と言
つてゐる。この講演は、《Die vorgeschichtliche Ausbr-
eitung der Germanen in Deutschland》といふ題であ
つて、其れは翌年の《Zeitschrift des Vereins für Volks-
kunde》誌上に掲載されてゐる。この講演に於いて始め
て現代獨逸考古學界の主流をなす Siedlungsarchaologie
が學術的に根柢づけられたのである。コッシナ教授は、
『私が、祖國の考古學と歴史とを結合し、今世紀の研究に
よつて蓄積された、祖國の大地よりの豊富な發見物から
其の無主觀性を奪はんと敢て試みるならば……』といふ
言葉を以つて此の革命的な講演を始めた。そして、『言語
の比較は、其の自體から遠古史に於いて何物をも決定す

第二十八卷 第三號

五五

ることは出来ないのであつて、其れは單に習得されるだけである』といふ確信を表明し、出土遺物の型式學的、地域的研究の必要と、その人類學との關聯を説いたのである。そして最後に、『獨逸の民族精神及び文化は、その力強き優越性の故に、他民族が歴史事實を歪めて行つたやうに、より廣い膨脹を支持し、かつ其の存在を保證する爲に、千年の所有權利益に據る必要はない。反對に其れは、我々獨逸人並びにゲルマン民族のあらゆる構成員を誇りを以つて満足さすものである。そして小さい北方の原初的民族の諸分派が、遠古及び古代に於いて如何にスカンデナヴィヤと獨逸を征服し、中世に於いては歐洲全體に、近世に於いては遠い大陸にまで如何に擴つたかに想到するとき、我々は彼等の力に驚歎せざるを得ないのである』と結んでゐるのである。

此等の結論を導き出したコッシナ教授の劃期的な *Siedlungsarchaeologische Methode* に就いて、教授は、講演のなかに説明されてゐる。即ち、其の原理は、一言にしていふと、『鋭くも限界づけられた考古學的文化的地域は

あらゆる時代に於いて、全く限定された民族或いは民族群に一致する』と考へるのである。そして更にコッシナ教授はかうつけ加へてゐる。

しかしながら、民族學的に嚴密に限定された適切な文化の例は、民族移動時代、即ち五六世紀のゲルマン文化、並びに、七、八世紀のスラヴ文化である。實際、此等二つの文化的遺産こそは、第一には、東エルベ地方のゲルマン人の移動に關する全く不明瞭な消息を補訂し、第二には、東獨逸及び埃太利に於ける後代のスラヴ人の移住の地域的膨脹を系統づける爲に、我々を授けうる唯一の財産である。

茲で私は少しく此の *Siedlungsarchaeologie* に就いて、具體的に申し上げることゝしたい。

即ち、コッシナの原理をもう少し分り易く説明すると、同様な文化財を所有する人類の集團は、私達が今日、民族または民族群と名づける協同社會に合致するといふのである。換言すると、一民族であれば、大多數の遺物は同一であるといふのである。そして、もし一地域に於

いて一般の型式とは違つた遊離した遺物があれば、それは交易もしくは掠奪によつて齎されたものと認める。例へば、新石器時代の獨逸には、遺物・遺跡によつて、四つの文化圏が設定される。即ち、北獨逸から南瑞典へかけて存した Grosssteingraberleute、チュールンゲンを中心とした中部獨逸の Schnurkeramiker、南獨から南露へかけて存した Bandkeramiker、東部ポネルムン及び東プロイセンからシベリヤに亙る Kammerkeramiker が其れである。そしてコッシナ教授は、Grosssteingraberleute は、クロマニヨン人より出たフール人種を中核として、オーリニヤック人より出た北方人種を交へて形成された民族となし、Schnurkeramiker は、北方人種を中核としてフール人種を交へた民族、Kammerkeramiker は、純然たる東方人種よりなる民族であり、Bandkeramiker は、東方人種を中核として、北方人種と、オーリニヤック人の分派たる西方人種の血を交へた民族であると考定するのである。そしてゲルマン人とは Grosssteingraberleute が青銅器時代に Schnurkeramiker と混血して一民族を

形成した時に生じたと想定するのである。そしてコッシナ教授は、所謂インドゲルマン民族とはオーリニヤック人とクロマニヨン人との混血によつて生じたものであつて、その混血の割合と、地域的條件によつて其の種々なる分派が生じたと見るのである。コッシナ教授に據れば、インドゲルマン民族は、北歐の出自であつて、其れを亞細亞的起源と説く如きは單なる言語の比較に基づいた根底なき學說に過ぎぬのである。また北獨逸に於ける青銅器時代の遺物、獨逸に於ける鐵器時代の遺物は、ゲルマン人の所産であつて、斷じて Bandkeramiker より出づるケルト人の所産ではないと考定したのである。そしてかゝる考へは、當然、ゲルマン人は、文化なき野蠻人ではなく、獨自な高い文化を所有した自然のまゝの農民であつたといふ劃期的な見解を導くに至つたのであつた。そして私達が教授の立論に於いて注意すべきことは、コッシナ教授が、人骨、遺物、言語といふ全く種類を異にする對象を安易に結合せず、各々の性質に即應し、混同することなく峻別し、そして最後に於いて綜合

的見解をえたことである。かやうな新しい方法論を考へ出した許りでなく、これを實際に施してかゝる新見解をえた點に、教授の學問の革命的であつた所以が存するのである。

五

一八九五年、コッシナ教授はカッセルで上述のやうな新しい *Siedlungsarchaeologie* を提唱したのであつたが、右に述べたやうな見解を明確に基礎づける爲に、この年からその逝去に至るまで毎年のやうに調査や發掘の爲に大旅行を始めたのである。例へば、一八九六年、リガに於いて第十回の全露考古學大會 (*Mezhdunarodnyj nauchnyj kongress*) が開かれた時などは、其の地に赴いて、沿ベルト地方の遺物、遺跡を調査した。特にこの頃から第一次歐洲大戰までの二十年間は、全く東奔西走、席の暖る暇がないほど調査、發掘旅行をしたが、茲では其の一々を省略して申し上げぬこととする。彼の足跡は獨逸國內に遍く印されたのみでなく、また諾威、瑞典、

丁抹、佛蘭西、白耳義、洪牙利、ルーマニヤ等へも調査旅行を企てた。就中、コッシナ教授にとつて感慨が深かつたのは、一九一五年マズーレンのレッツェン (*Litzien in Masauen*) 附近でゲルマン人の墓地を發掘したことであつた。此の時、ヒンデンブルク元帥は、親しく發掘場に臨んで、コッシナ教授の講演を聴いたが、それが終つてから元帥は、かう述べてゐる。

高き價値ある古代ゲルマン人の文化を見て、吾々が劍の鋭さと青年の逞しさを維持しうる時のみ、吾々は獨逸人たりうることを、更めて明かにせねばならぬ。

かゝる多年に亙る夥しい旅行によつて、尨大な材料が教授の手に集められるに至つた。教授は、此等を時代的に、地域的に整理し、多くの論文を發表した。教授が後になつて書いた概論書は、かうした夥しい論文や報告の基礎の上に立つてゐるのであつて、決して今まで知られた材料を都合のよい理論で調理したやうなものではないのである。

コッシナ教授の概論的な論考としては、既に一九〇二年に『Zeitschrift für Ethnologie』誌上に發表された『Die indogermanische Frage archaisch beantwortet』を掲げることが出来る。しかしながら、一九一二年に發行された『Die deutsche Vorgeschichte』こそは、教授

の代表作であり、かつ現代獨逸考古學の基礎をしつかりと据ゑた不朽の名著と言はねばならない。此の書は、石器、青銅器、鐵器時代と順を追うて述べてゐる點で、さして在來の此の種概論書と變りないが、文化を人種と遊離せしめず、あくまで透徹した見解を以つて一貫してゐる點で、類書とはまるで面目を異にするのである。本書が今日なほ版を重ね、獨逸の考古學徒の『Mein Kampf』とされてゐるのも、全く理由のないことではない。此れに次ぐ著作としては、一九二八年に發表された『Ursprung und Verbreitung der Germanen in vor- und frühgeschichtlicher Zeit』と彼の死後に上梓された『Germanische Kultur im I. Jahrtausend n. Chr.』がある。前者は、西紀一、二世紀のゲルマン人の分布から

説き起し、倒叙的に遡つて新石器時代に及び、ゲルマン人の起源を明瞭に論述したものであつて、後者の嚴格かつ公平な研究と相俟つて、所謂ゲルマン考古學の不動の體制を整へたものである。

コッシナ教授の小著『Allgermanische Kulturhöhe』は、一九一七年に行つた講演を基として、一九二七年に出版されたものであるが、簡潔な形の中に古代ゲルマン人の文化の高さを論證したものであつて、今日獨逸で最も一般から讀まれてゐる本の一つである。もとより一日も凝滞せぬ學界にあつては、コッシナ教授の勞作と雖も今日では部分的に修正をみてゐるやうであるが、教授が世間や學界の冷遇の中にあつて調査した資料や書き上げた論文著作は、其れによつて考古學自體を頗る高揚したものであることは、否定しえない事實なのである。

六

度々述べたやうに、コッシナ教授の一生は、實に恵まれぬものであつた。學界に於いて教授が蒙つた迫害は、

これを二つに分けて考へられるやうである。一は、教授の *Siedlungsarchaeologie* を必要以上に危かしく思ひ、これを徹遠せんとした仲間であつて、多くの所謂『先史學者』達がそれであつた。第二は、國家主義的見地にたち、羅馬文化を低く評價する教授の見解に對する古典考古學者達の反對運動であつた。何んと言つても、大戰以後は、自由主義や國際主義の盛であつた時代であつたから、一見時代に逆行するが如き觀のあるコッシナ教授の見解が世間及び學界からなか／＼認められなかつたのは、想へば理由のないことではなかつた。歐洲の大學の考古學關係の講座の大部分が、古典考古學者によつて占められてゐることは、周知の通りであるから、柏林大學の古典考古學の諸教授によつて壓迫し続けられてゐたコッシナ教授の大學での生活は、決して快いものではなかつたやうである。加之、コッシナ教授は、相手の反駁を黙殺したり、愛嬌ある言葉で報えるといつた外交的手腕をもたずかへつてむきになつて、相手を鋭くきめつけずにはおかなかつた爲に、彼は必要以上に苦しい立場に立つこ

ともあつたやうである。柏林大學に於いて、教授に與へられたのは、狭い一室だけであつて、其處が研究室兼演習室でもあつた。研究室の豫算といふほどのものもなかつたので、講義に必要な寫眞類を幾千枚も揃へることは、並大抵ではなかつた。たゞコッシナ教授に恵まれたことは、教授の下に毎年眞面目で教授を敬慕してやまぬ學生が絶えなかつたことである。大學は、此等卒業生に一顧も與へなかつたので、彼等は地方の博物館等へ赴任し、師コッシナより授けられた新しい方法をもつて、地方の所謂『先史時代』の新研究に従事するやうになつたのである。

七

けれどもコッシナ教授は、毎年數名の學生を養成したゞけでは、彼の主張をよく傳播し難いことを悟つたので、廣く天下に同志を募つて、一つの學會を設立しようと考へるに至つたのである。既に、一九〇五年と六年の二回に互つて、教授は、弟子のハーネ(Hans Halne)の

協力を得て準備會議を開いたことであつたが、一九〇七年の末には、『先史學會』(Gesellschaft für Vorgeschichte)の計劃が出来上つた。併し、例によつて古典考古學者側からは、甚だしい妨害を受けた。翌年の末に、コッシナ教授は、いよく急速に會を創設する爲に、全國に檄を飛ばし、百二十名ばかりの加入者をえて一九〇九年に『獨逸先史學會』(Deutsche Gesellschaft für Vorgeschichte)を設立したのである。四面楚歌の裡に、僅か許りの會員をやつと獲得した此の小さい學會が今日の大をなすとは、何人も想像しえなかつたことであつた。學會の創立と共に、その機關誌《Mannus, Zeitschrift für Deutsche Vorgeschichte》も、其の年の三月から、年四回つづ發行され始めた。コッシナ教授は、自ら陣頭に立つて逝去に至るまで、即ち第二十三巻まで此の雜誌を編輯された。これと共に、纏まつた研究を發表する『マンヌス叢書』(Mannus-Bücherei)を計劃し、一九一一年から始めて、逝去に至るまでに五十一冊を刊行し、獨逸の所謂『先史學』に、評價し難いほど貴重な功獻をしたのであつた。

グスターフ・コッシナ教授と現代獨逸考古學界

其れと共に、コッシナ教授は、一九二五年ブレスラウ支部の爲に月刊雜誌《Nachrichtenblatt für Deutsche Vorzeit》を創刊し、翌年から弟子のヤーン(Martin Jahn)教授に、その編輯を委ねた。コッシナ教授は、雜誌の經營にも、並々ならぬ手腕を示した。それは最大の學術雜誌すら休刊を餘儀なくされた大戦時代と戦後のインフレ時代に於いてすら、雜誌は滞りなく刊行されたことから言つても、明瞭である。

この『獨逸先史學會』は、各地に支部をもち、各支部は、毎年四、五回の講演會や遺跡の見學を行つた。その外、年毎に後には隔年に總會が開かれた。即ち、ハノーヴ、エルフルト、コブレンツ、ドルトムンド、ケルンに於いて開催され、また大戦後、一九二〇年と二二年には伯林で、次いでケーテン、ブラウンシュヴァイク、マゲブルクで開催された。コッシナ教授が主宰した最後の總會は、一九三〇年、ケーニヒスベルクで開催されたのであつた。かやうに『獨逸先史學會』は年々隆盛となり、漸時、社會及び學界の支持を受け、それと共に先史學界に

於けるコッシナ教授の聲名は年と共に加はりつゝあつたのである。然も、『獨逸先史學會』が更に一段と飛躍する日を近うして教授は逝去されたのであつた。そしてかくも學會を隆盛に導いた原因としては、獨逸内に國粹的氣運が鬱然と勃興して來たのもさることながら、教授がよく後進を導き、此等弟子達が等しく教授の學問と人格に敬服し、先史學會の幹部として獻身的に骨を折つたことが挙げられねばならないのである。コッシナ教授の弟子で、學會の幹部となつた人としては、ハッレ大學教授ヘンス・ハーネがをるが、コッシナ教授の後を追つて歿した。次いでプレスラウ大學教授のマルチン、ヤーン、コッシナ教授の後を承けて伯林大學助教となり、ついで教授となつたラインネルト(Hans Reineit)がをる。その他シナル(W. Schulz)、シタンプフス(R. Stampfer⁵⁾、ボーム(W. Böhm)等々の現代獨逸の所謂『先史學界』の錚々たる學者が群をなしてゐるのである。

八

コッシナ教授が夙に十九世紀の末葉から全力を盡して提唱して來た *Eine hervorragende nationale Wissenschaft* としての所謂『獨逸先史學』が、民族なるものを其の世界觀の中心におく民族社會主義と全くその傾向を一一にすることは、今更贅言するまでもないことである。従つて、コッシナ教授は、一九二〇年代に至つてヒットラーが國家社會主義を標榜して驟起した時、心からなる支持と擁護を惜まなかつたことは、當然であつた。そしてコッシナ教授は、學の領域を越えぬ範圍内に於いて、ナチスの理論體系の樹立に多くの論據を呈供したのである。『獨逸先史學會』は、教授の在世中には、今日のやうな發展はしなかつたにしても、コッシナ教授は、一九三〇年九月、ナチス黨が一〇七人の議員を以つて國會に乗り込んだことを目撃したのであるから、獨逸國家と『獨逸先史學』の限らない發展を確信しながら世を去つたに違ひないのである。

さてコッシナ教授の歿後、獨逸先史學會を率ゐるのは、現伯林大學教授のハンス・ラインネルトである。テ

インネルト教授は、南獨逸の新石器時代を研究した人であつて、アイヒフェール文化の主要遺跡たる Federsee-moor 遺跡の研究によつて著名である。彼はまた一面政治的手腕も相當に備へてゐて、コッシナ教授門下では、最もナチスに接近してゐた人である。既に一九三一年、ラインネルト教授は、*Nationalsozialistische Monatshefte* に寄稿し、先史學の世界觀的意義に就いて、自己並びに先史學の立場を明かにした。そしてハウスホーファー教授と共にアルフレッド・ローゼンベルクのブレン・トラストに加つた譯である。この結果、ヒットラーの政權掌握後、ラインネルト教授の學界に占める勢力は、極めて強烈となつた次第である。即ち、一九三四年に至つて『獨逸先史學會』は、*Reichsbund für Deutsche Vorgeschichte* と改稱されて、從來のあらゆる所謂『先史學』關係の學會を統率するやうになり、ローゼンベルクの統率するナチス黨精神世界觀教育監督局には、ラインネルトを部長とする『先史學中央本部』(*Hauptstelle für Vorgeschichte*) が置かれた。一九三六年には、ライ

ンネルトを所長とする *Reichsinstitut für Vor- und Frühgeschichte* が設立されたし、翌三七年十一月には、前述の『先史學中央本部』は、總統によつてナチス黨先史學局に昇格され、ラインネルト教授が局長に任命された。*Reichsbund für Deutsche Vorgeschichte* は、機關誌として『*インヌス*』を發行し、『*インヌス叢書*』を刊行する外、獨逸に於ける考古學研究を統制し、指導する任務を受けたのである。またナチス政權と共に、獨逸先史時代史は、中等學校以上の學校での必修課目となつた。何故ならば、所謂『獨逸先史學』は、單に知識としての學問的意義をもつ許りでなく、世界觀的原理の故に、あらゆる獨逸人は如何なる仕事に従事するとも、その概略だけは知得しておくべきものと考へられてゐるからである。そして此の所謂『先史學』の普及と言はうか、『先史學』による國民の教養に携るのが、先史學局なのである。

なほ獨逸には、國外の考古學的研究を企劃し、指導する機關としては、目下、伯林大學のローデンベルト教授 (*G. Rodenwald*) の統率する『獨逸考古學研究所』(*Deuts-*

ches archäologisches Institut) 及び Reichsbund für deutsche Vorgeschichte とは、現在は、嘗ての確執も解け、相提携して國內、國外の考古學研究に盡力してゐる。

勿論、現代の獨逸の所謂『先史學界』を形成する人々は、コッシナ教授の門下ばかりではないのである。肝腎の伯林にも、『先史學雜誌』(Prähistorische Zeitschrift) に據る故シマク・ホルト (C. Schuchardt)、ウンマエアツ・アークト (W. Unverzagt)、ゼーガア (H. Seger) 等がある。けれども、此等の人々は、ハンノーヴァ大學を根據として相當の地位を占めてゐるヤコブ・フリーゼン教授 (K. H. Jacob-Friesen) 等と共に、かなりラインネルト派に近寄つて來てゐるやうにみられる。これに對してかのヘルネス教授 (M. Hoernes) 門下のギエンのメンギン教授 (O. Menghin)、マールブルクのフォン・メルハルト教授 (G. von Merhart) 等は、對立とは言ひえないとしても、比較的冷淡な態度を執つてゐるやうに見受けられる。

コッシナ教授は、燃えるが如き祖國愛を抱きながら、あくまで學の領域内に踏み留まつて、獨逸の遠古の文化と民族とを委細かつ具體的に究明し、かつゲルマン考古學を今日あらしめたのであつた。然もコッシナ教授は、ナチス黨を大いに支持はしたが、此れに阿諛しようとはしなかつた。ラインネルト教授は、自ら學問の領域を出て政治に關與してゐるのである。ゲルマン考古學を、現在のやうに獨逸人の間に普及せしめた功績は、同教授に考古學史上、獨自な地位を與へるものであり、かつまた獨逸考古學の研究に統制を與へたことも亦、没却し難い業績と謂ふべきである。實際、現代は、最も政治的な時代であるから、私達が欲すると否とに拘らず、政治は私達に迫つて來る。従つて、以前にさうあつた如く、學問が現世に超越的であることは許されぬのであるが、其のことは、學問を政治的霸權に屈從せしめるとか、或いは學問と政治とが馴合ふのを意味するとは思はれない。それゆゑ、獨逸の考古學界が、將來更に一段と飛躍する爲には、果たして今日のやうな、時代の寵兒然たる状態が幸

であるか否かは、私達の最も想ひを到すべきところであらう。雑誌『マンヌス』等に載せられた最近の諸論文や、此の一派の人々がものした概説書などを檢へると、方法もコッシナ教授の其れを繼承した。けであつて、何處かしら行詰りと虚勢とが感じられるやうである。ヘルシンのタールグレン教授 (A. N. Tallgren) は、『ロッシナ教授の役目は濟みました。今後は、フォン・メルヘルト教授と其の弟子達が注目に値します』と、私に語られたが、或いはさうかも知れぬのである。

將來はともかくとして、獨逸考古學が、國內に於いてあれほど弘通してゐることは、私達の羨望に堪へぬ慶事であるし、また一昨年、獨逸軍がウクライナを占領するや、ライシネルト教授を團長として、樞軸諸國の考古學者を動員し、其の地の古代文物の保護と調査を逸早く行はしめたことなども、如何にも考古學を尊重する、否文化を尊重する獨逸らしい遣り方と思つたことである。そして今更のやうに、國民及び政府の獨逸考古學への認識を今日あらしめたコッシナ教授の偉大なる功績に想到せ

ざるを得なかつた次第である。〔一八・三・六〕

【追記】

本文は、今年三月七日開催の考古學談話會の席上で行つた講演の草稿である。講演の性質上、註して出典を明記することはしなかつたが、本稿を草するに當つたのは、R. Stampfuss; Gustaf Kossinna, ein Leben für die Deutsche Vorgeschichte (Leipzig, 1935). H. Gummel; Geschichte der Urgeschichtsforschung in Deutschland (Berlin, 1938). W. Bohm; Handlexikon der deutschen Vorgeschichte (München, 1938) 及びコッシナ教授の著書に據つたことを、茲に明かにしておきたい。なほコッシナ教授一派の研究によつて、獨逸の遠古史が如何に體系づけられてゐるかに就いては殆ど論觸する暇をもたなかつたが、他日委細に解説する機會をもちたいと思ふ。終りに臨み、本文を草するに當つて種々御援助と御教示を賜はつた獨逸考古學研究所羅馬支所並びに梅原末治先生に、厚く感謝の意を表す。